英語・日本語・中国語における自動詞場所格交替の容認性の差について

森　川　文　弘

1．序論

英語には自動詞場所格交替という現象があることが知られている。同一の動詞が2通りの構文に出現できるというもので、1つ目の構文では場所を表す副詞句に出現する要素が2つ目の構文では主語の位置に「格上げ」され、同時に1つ目の構文では主語であった要素が2つ目の構文では *with* を伴う斜格句に「格下げ」されるという現象である。

(1) a. Moonlight was shimmering on the lake.
　　b. The lake was shimmering with moonlight.
(2) a. Bees are swarming in the garden.
　　b. The garden is swarming with bees.

(1a)(2a)の場所句に現れる *the lake*、*the garden* が(1b)(2b)では主語になっており、(1a)(2a)の主語である *moonlight*、*bees* が(1b)(2b)では *with* 句に現れている。

しかし日本語や中国語ではこれらの文の容認性が英語とは少し異なる。

(3) a. 月の光が湖面に輝いている。
　　b. 湖面が月の光で輝いている。　　(山梨 2004: 158)
(4) a. 蜜蜂が庭に｛群がっている／集まっている／たかっている／密集している｝。
　　b. *庭が蜜蜂で｛群がっている／集まっている／たかっている／密集している｝。

(1a)(1b)を日本語に翻訳した(3a)(3b)はともに容認可能な表現であり、日本語にも場所格交替が可能な例があることを示している。しかし(2)の日本語訳である(4)については、場所句を使用する(4a)は容認可能であるが、場所を主語にした(4b)は容認不可能である。

(5) a. 月光在湖面上闪耀着。
b. *湖面在〔以／用／因〕月光闪耀着。
(6) a. 蜜蜂在花园里蜂拥着。
b. *花园在〔以／用／因〕蜜蜂蜂拥着。

(5)(6)は(1)(2)の中国語訳であるが、存在物を主語にする(5a)(6a)は容認可能であるものの、場所を主語にする(5b)(6b)はいずれも容認不可能である。これらの例から自動詞場所格交替の容認性は、言語によって、そして動詞によって、ばらつきがあることがわかる。

本論文では認知言語学の立場から、英語、日本語、中国語の自動詞場所格交替の容認性を比較する。第2節で各言語の様々な動詞による容認性の差を観察、第3節で従来の自動詞場所格交替の分析を概観した後、第4節で各言語間の相違について考察する。

2. 言語・動詞による自動詞場所格交替の容認性の差

2.1. 英語・日本語・中国語における自動詞場所格交替

第1節で見たように、英語では多くの自動詞が2つのパターンの文に出現できる。

(7) a. Moonlight was shimmering on the lake.
b. The lake was shimmering with moonlight. (=1)
(8) a. Many cars are jammed on the road.
b. The road is jammed with many cars.
(9) a. Water overflowed from the dam.
b. The dam overflowed with water.
(10) a. Bees are swarming in the garden.
b. The garden is swarming with bees. (=2)
(11) a. Juice was dripping from the peach.
b. The peach was dripping with juice.
(12) a. Laughter resounded through the hall.
b. The hall resounded with laughter.
(13) a. Ants are crawling over the biscuit.
b. The biscuit is crawling with ants.

(14) a. Blood was running down his knee.
b. His knee was running with blood.

Salkoff (1983) は英語の自動詞場所格交替に出現する動詞を約350挙げて分析を行っており、この現象を起こす動詞を完全に予測することは不可能であるとしながらも、ある種の動詞群はこの交替現象に生産的に出現できると指摘している。

(15) a. Verbs of dancing: *dance, waltz, tango, polka, skip, jig, romp, caper, curvet...*
b. Verbs of light emission: *flash, glow, glitter, gleam, sparkle, ...*
c. Verbs of sound emission: *echo, sound, resound, ring, blare, ...*
d. Verbs of jumping: *hop, jump, leap, bound, skip, spring, caper, ...*
e. Verbs of running: *run, race, trip, speed, gallop, scoot, trot, ...*
f. Verbs expressing the notion of large number: *abound, brim over, burst, be dense, overflow, be populous, be rampant, be rife, swarm, teem, be thick, ...*

Levin (1993) もこの交替に出現する動詞を約180挙げ、分類を行っている。「光の発生を表す動詞群」「音の発生を表す動詞群」が含まれているのはSalkoff (1983) と同様だが、「物質の噴出を表す動詞群」が加わり、また各種の「存在のあり方を表す動詞群」という概念によっていくつかの動詞が独自の分類に再編されている。

(16) a. Verbs of light emission: *beam, blink, burn, blaze, flame, flare, flash, flicker, ...*
b. Verbs of sound emission: *babble, bang, beat, beep, bellow, blare, blast, blat, ...*
c. Verbs of substance emission: *drip, foam, gush, ooze, radiate, spout, sprout, ...*
d. Verbs of sound existence: *'din, echo, resonate, resound, reverberate, ...*
e. Verbs expressing entity-specific modes of being: *bloom, blossom, bristle, foam, ...*
f. Verbs expressing modes of being involving motion: *dance, flutter, pulsate, ...*
g. Swarm verbs: *abound, bustle, crawl, creep, hop, run, swarm, swim, teem, ...*

例えば *dance*、*jump* などの動詞は、(17)(18)のような「踊る」「跳ねる」という意味ではこの交替を起こしにくく、(19)(20)のように「まるで踊っているような様子である」「場が盛り上がる」というメタファー的な事態描写では可能なため、この分析は卓見と言える。

(17) a. Flies danced among the flowers.
b. *The flowers danced with flies. (Salkoff 1983: 318)
(18) a. People were jumping lightly (for exercise) in the gym.
b. *The gym was jumping lightly (for exercise) with people.
(19) a. Enthusiasm danced in his eyes.
b. His eyes danced with enthusiasm. (Salkoff 1983: 318)
(20) a. Young people were jumping in the concert hall.
b. The concert hall was jumping with (the excitement of) young people.

2.2. 日本語における自動詞場所格交替

第1節で見たように、日本語にも同様の場所格交替現象が存在する。

(21) a. 月の光が湖面に輝いている。
b. 湖面が月の光で輝いている。 (=3)
(22) a. 多くの車が道路で｛渋滞している／つかえている｝。
b. 道路が多くの車で｛渋滞している／つかえている｝。
(23) a. 水がダムから溢れた。
b. ダムが水で溢れた。
(24) a. 蜜蜂が庭に｛群がっている／集まっている／たかっている／密集している｝。
b. *庭が蜜蜂で｛群がっている／集まっている／たかっている／密集している｝。(=4)
(25) a. 果汁が桃から｛したたった／こぼれた／垂れた／染み出した｝。
b. *桃が果汁で｛したたった／こぼれた／垂れた／染み出した｝。
(26) a. 笑い声がホールに｛響いた／反響した／こだました｝。
b. *ホールが笑い声で｛響いた／反響した／こだました｝。
(27) a. 蟻がビスケットの上を｛這い回った／もぞもぞ動いた｝。
b. *ビスケットが蟻で｛這い回った／もぞもぞ動いた｝。
(28) a. 血が彼の膝の上｛に／で｝流れていた。
b. *彼の膝が血で流れていた。

(21) から (23) では場所格交替が起きるのに対し、(24) から (28) では (b) のパターンが容認不可能になる。日本語ではこれら両方のパターンの文を成立させることができる自動詞はそれほど多くない。

(19) (20) に対応する文としては (29) (30) が考えられるが、日本語ではこのような状況で場所を主語にする場合、「踊る」よりも「輝く」「燃える」、

「跳ねる」よりも「盛り上がる」という語句が適切である。

(29) a. 彼の眼には情熱（の炎）が｛踊っていた／輝いていた／燃えていた｝。
b. 彼の眼は情熱で｛*踊っていた／輝いていた／燃えていた｝。
(30) a. 大勢の若者たちがコンサート会場で｛跳ねていた／盛り上がっていた｝。
b. コンサート会場は大勢の若者たちで｛*跳ねていた／盛り上がっていた｝。

言語が異なれば用いられるメタファー表現が異なるとはいえ、同様の状況で場所格交替が起こるという事実は注目に値する。

2.3. 中国語における自動詞場所格交替

第1節で見たように、中国語では場所を主語にした表現はいずれも容認不可能である。

(31) a. 月光在湖面上闪耀着。
b. *湖面在｛以／用／因｝月光闪耀着。 (=5)
(32) a. 很多车在路上堵着。
b. *路在｛以／用／因｝很多车堵着。
(33) a. 水从大坝溢出来。
b. *大坝｛以／用／因｝水溢出来。
(34) a. 蜜蜂在花园里蜂拥着。
b. *花园在｛以／用／因｝蜜蜂蜂拥着。 (=6)
(35) a. 果汁从桃子里滴下来。
b. *桃子｛以／用／因｝果汁滴下来。
(36) a. 笑声在大厅里回响着。
b. *大厅在｛以／用／因｝笑声回响着。
(37) a. 蚂蚁在饼干上爬着。
b. *饼干在｛以／用／因｝蚂蚁爬着。
(38) a. 血在他的膝盖上流着。
b. *他的膝盖在｛以／用／因｝血流着。

(31) から (38) のどの例でも、場所を主語にするパターンの文は容認不可能である。特に英語の *with* にあたる前置詞（介詞）については、道具や手段、拠りどころを表す「以」「用」、原因を表す「因」など、何を使用しても容認可

能にならない。それは（19）（20）のようなメタファー的表現でも同様で、どのような動詞についてもこのような交替は許されない。

（39）a. 热情在他的眼睛中｛*跳舞／闪烁｝着。
　　b. *他的眼睛在｛以／用／因｝热情｛跳舞／闪烁｝着。
（40）a. 年轻人在音乐会会场里{跳来跳去／激动／狂欢}着。
　　b. *音乐会会场在｛以／用／因｝年轻人{跳来跳去／激动／狂欢}着。

（39a）が示すように、中国語では「热情」の活動についてメタファー的表現を用いる場合、「跳舞（踊る）」のような表現はそもそも用いられず「闪烁（ちらつく、ゆらめく）」となるが、いずれにしても（39b）のようなパターンの文では不適格となる。（40）についても「跳ね回る」のような動詞を「場所が盛り上がる」のような意味では使用できない。

3．自動詞場所格交替の分析

3.1. Langacker（1991, 2002）

Langacker（1991, 2002）は、自動詞場所格交替が取る２つの構文は同様の意味内容を持つが、Figure/Ground の選択が異なると分析している。

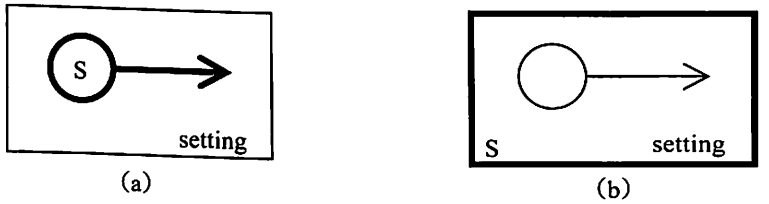

図１．場所格交替の事態認知モデル（Langacker 2002: 232改変）

図１(a)（b）はいずれも、ある場所（長方形：例えば *the lake*）にある存在物（円：例えば *moonlight*）があり、そこである行為（矢印：例えば *shimmer*）を行っているという状況をベースにしている。図１(a）の見方では存在物が注目の対象つまり Figure（太線）となって主語 S に選択され、その結果 *Moonlight is shimmering on the lake.* のようなパターンの文になるのに対し、図１(b）の見方をすると場所全体が注目されて Figure となり主語 S に選択され、*The lake is shimmering with moonlight.* のようなパターンの文ができる。

この分析は自動詞場所格交替現象をうまく説明しているものの、どのような場合に交替が可能か、あるいは不可能かを判断する材料は与えてくれないため、さらなる詳細な分析が必要である。

3.2. Morikawa（2001）

Morikawa（2001）では自動詞場所格交替を一種のメトニミーであると分析し、Langacker（1993）がその分析に用いた参照点構造の成立条件を元に、(i) 存在物の動作主性が低い、(ii) 存在物が場所全体に溢れている、という条件を満たした場合に「場所」の認知的際立ちが高くなり、主語に選択できると論じた。

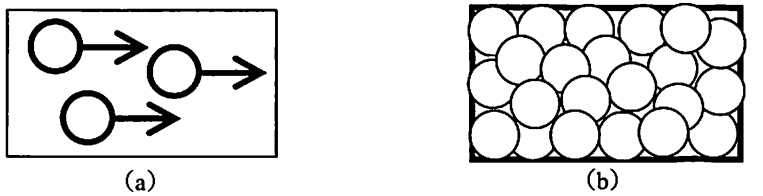

図２．場所格交替の事態認知モデル（Morikawa 2001: 156 改変）

Fillmore（1968）、S. Anderson（1971）、J. Anderson（1977）、Salkoff（1983）、Levin（1993）、Dowty（2000）など多くの研究者が指摘しているように、場所格を使う文は存在物がこの場所内の一部分のみに存在していても成立するのに対し、*with* 句を使う文は存在物がこの場所全体に広がっている（あるいは場所全体の印象を変えている）状況を表す。図２(a）の状況では存在物を Figure、この出来事を存在物の行為と解釈するのが自然であるのに対し、図２(b）のような状況では存在物が場所全体と一体化し、本来存在物の行為を表している動詞が場所全体の状態を描写しているものと錯覚されるため、場所と動詞がメトニミー的に結びつくことが可能になる。Pinker（2007）も同様の説明を採用しており、対象が存在物で埋め尽くされているという感覚的なイメージによって、対象と存在物の区別がぼやけてしまい、通常はその存在物がする動作（*swarm*、*drip*、*crawl* など）をあたかも対象全体がしているかのような感覚になると論じている。

4．考察

4.1. 中国語における場所主語表現

第2.3節で見たように、中国語ではこの種の場所格交替は全くといって良いほど生じない。第3.1節で見たLangacker（1991, 2002）の分析に照らせば、中国語はそもそも図1（b）のようなものの見方をしない言語だと言える。Talmy（1978）は、Figure Objectを「動いているものまたは概念上動く可能性があるもの」、Ground Objectを「Figureの位置や移動経路を特徴づけるための参照枠を提供するもの」と提案している。したがって活動している存在物をFigure、その存在物がある場をGroundとする図1（a）は人間にとって自然なものの見方であり、いかなる場合でもそれを崩さない中国語はその点で一貫している。

ところで中国語において、自動詞場所句交替の（b）のパターンに見える構文がある。

(41) a. 湖面（上）闪耀着月光。
b. 路（上）堵着很多车。
c. （从）大坝溢出来水。
d. 花园（里）蜂拥着蜜蜂。
e. （从）桃子（里）滴下来了果汁。
f. 大厅（里）回响着笑声。
g. 饼干（上）爬着蚂蚁。
h. 他的膝盖（上）流着血。
i. 他的眼睛（中）闪烁着热情。
j. *音乐会会场（里）{跳来跳去／激动／狂欢} 着年轻人。

これらの文は場所を表す語句から始まり、その次に動詞が、その後に動作の主体が並ぶために、一見自動詞場所格交替の場所主語文のように見える。しかし文頭の語句は主語ではなく、実際には場所句に付随している前置詞（介詞）や後置詞（方位詞）が省略されており、これらは中国語文法でいう存現文、英語文法でいう場所句倒置文に相当する文型である。(41d) の「群がっている」のように多数の存在物が想起される動詞については第3.2節で述べた全体効果が感じられるものの、(41g) の「這っている」のような動詞を用いた文は、存在物が1匹あるいは少数の蟻であっても成立し、これは英語の場所句倒置文 *On the biscuit {is/are} crawling {an ant/some ants}.* と共通の特徴である。ま

た（41j）のような純粋な行為動詞が容認されにくいのも英語の場所句倒置文と同様である。Chen（2003）は英語の場所句倒置文をGround-before-Figure Constructionと分析しており、(41) の例も同様と考えるならば、やはり中国語はあくまで場所がGround、存在物がFigureという見方を堅持する言語であると考えられる。

4.2. 英語における主語選択

中国語の場合とは対照的に、英語の文においてはさまざまなものが主語になりうる。Shibatani（1991）によれば、英語は主語の文法化が進んだ言語で、動作主以外の要素でも容易に主語に選択される。

(42) a. David killed Goliath
b. John saw Bill
c. I like beer
d. The recent earthquake killed 150 persons
e. John has three children
f. This key won't open the door
g. This tent sleeps five
h. The 1930's saw the world at the brink of disaster
i. £100,000 won't buy a decent flat in London anymore（Shibatani1991:102）

（42a）では動作主が主語に選択されているが、(42b)（42c）では経験者、(42d）では外的原因、(42e）では所有者、(42f）では道具、(42g）では場所、(42h）では時間、(42i）では行為に関連した対象物が主語に選択されている。特に注目すべきは（42g）(42h）で、出来事の参与者ではなく「セッティング」が主語になるような文が許されているが、これらに相当するような表現は日本語や中国語では普通ではない。英語は主語の選択に関して意味役割の制限が緩い言語だと言える。

この観点から自動詞場所格交替を見ると、英語が図1（b）のような認識の仕方を許しやすいことも納得できる。特に図2（b）のような状況が成立した場合には、多くの自動詞が存在物の動作ではなくその場所の状況を描写しているものと再解釈され、(b）パターンの文の成立を許す。英語にはその素地があると言える。

4.3. 日本語における自動詞場所格交替

Figure/Groundを入れ替える容易さという点で、日本語は英語と中国語の間にある言語だと言える。交替が起こるためには基本的に図2（b）のような状況が成立する必要があるが、それでも交替を許す動詞は英語と比べて非常に少ない。

(43) a. 光の発生を表す動詞：光る、輝く、（感情が）燃える
b. 物質の存在を表す動詞で交替するもの：満ちる、一杯になる／である、溢れる、漲る、つかえる、詰まる、渋滞する、散らかる、にじむ、（感情が）盛り上がる

これらの動詞が交替を起こすのには十分な理由がある。(43a) の光の発生を表す動詞については、第3.2節で論じたように、光の発生源とその場所が一体化していれば場所全体が光を発していると錯覚（あるいは解釈）することは大いにありうるので、交替が起こっても不自然ではない。また（43b）のほとんどの動詞はそもそも存在物と場所とが一体化する様子を表現した動詞であり、場所に焦点を当てた見方をしやすいと考えられる。

以上の説明が正しければ、このような認識はどの言語においてもほぼ共通なはずである。実際これらの動詞は、英語や中国語の場所主語パターンの文において斜格句を省略した場合にも容認されやすい。

(44) a. The lake was shimmering.
b. The road is jammed.
c. The dam overflowed.
d. *The garden is swarming.
e. *The peach was dripping.
f. *The hall resounded.
g. *The biscuit is crawling.
h. *His knee was running.
i. *His eyes danced.
j. *The concert hall was jumping.

(45) a. ?湖面在闪耀着。
b. ?路在堵着。
c. ?大坝溢出来。
d. *花园在蜂拥着。
e. *桃子滴下来。
f. *大厅在回响着。
g. *饼干在爬着。
h. *他的膝盖流着。
i. *他的眼睛在｛跳舞／闪烁｝着。
j. *音乐会会场在{跳来跳去／激动／狂欢}着。

（44a）から（44c）までは斜格句がなくても容認可能であるが、（44d）から（44j）ではそれが必要不可欠な要素である。このことから、(7)（8）(9) で交替が起こるのはごく自然であること、そして（10）(11)（12）(13)（14）(19)（20）では場所をFigureにするという通常無理な解釈をこの要素が補助し可能にしていることがわかる。(45a) から（45c）までにやや不自然さがあるのは、第4.1節で見たとおり場所をFigureにする見方が中国語では不自然なためと思われるが、それでも（45d）から（45j）までと比べれば容認されやすい。日本語では「デ」句があってもなくても容認性は変わらない。

(46) a. 湖面が輝いている。
b. 道路が｛渋滞している／つかえている｝。
c. ダムが溢れた。
d. *庭が｛群がっている／集まっている／たかっている／密集している｝。
e. *桃が｛したたった／こぼれた／垂れた／染み出した｝。
f. *ホールが｛響いた／反響した／こだました｝。
g. *ビスケットが｛這い回った／もぞもぞ動いた｝。
h. *彼の膝が流れていた。
i. *彼の眼は踊っていた。
j. *コンサート会場は跳ねていた。

つまり日本語で交替が起こる場合にはどの言語においても交替が起こりやすいということであり、日本語の場所格交替の容認性がある意味人間の自然な認識の仕方に基づいていることを示している。

5．結論

本論では英語、日本語、中国語の自動詞場所格交替の容認性の差について考察した。場所を Figure とみなして主語にする認識の仕方について、英語は比較的許容しやすく、日本語は英語よりも制限が強く、中国語はほとんど許容しないという傾向が見て取れる。言語表現は外界の状況を人間がどのように解釈するかを反映しており、その方法が言語間である程度共通であるが、同時に多少異なることを示すことができたと考えている。

謝辞：この論文を執筆するにあたり、中国語例文の作成や文法性判断において多大なご指導とご助力をくださった奥田寛先生、石暁軍先生に心より感謝の意を表したい。

参考文献

Anderson, John M. (1977) *On Case Grammar*, Humanities Press, Atlantic Highlands, New Jersey.

Anderson, Stephen R. (1971) "On the Role of Deep Structure in Semantic Interpretation," *Foundations of Language* 6, 387－396.

Chen, Rong (2003) *English Inversion: A Ground-before-Figure Construction*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Dowty, David (2000) "'The Garden is Swarming with Bees' and the Fallacy of 'Argument Alternation,'" *Polysemy: Theoretical and Computational Approaches*, ed. by Yael Ravin and Claudia Leacock, 111－128, Oxford University Press, Oxford.

Fillmore, Charles J. (1968) "The Case for Case," *Universals in Linguistic Theory*, ed. by Emmon Bach and Robert Harms, 1－88, Holt, Rinehart and Wilson, New York.

Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar* vol. II: *Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford.

Langacker, Ronald W. (1993) "Reference Point Constructions," *Cognitive Linguistics* 4, 29－40.

Langacker, Ronald W. (2002) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin.

Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press, Chicago.

Morikawa, Fumihiro (2001) "Filled to Overflowing: A Study of Locative Alternation," *JELS* 18, 151－160.

Pinker, Steven (2007) *The Stuff of Thought: Language as a Window into Human Nature*, Viking, New York.

Salkoff, Morris (1983) "Bees are Swarming in the Garden: A Systematic Synchronic Study of Productivity," *Language* 59, 288－346.

Shibatani, Masayoshi (1991) "Grammaticalization of Topic into Subject," in E. C. Traugott and G. Heine, eds. *Approaches to Grammaticalization* vol. II: *Focus on Types of Grammatical Markers*, 93－133, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.

Talmy, Leonard (1978) "Figure and Ground in Complex Sentences," in J. Greenberg et. al., eds. *Universals of Human Language* vol. 4, 625－649, Stanford University Press, Stanford.

山梨正明（2004）『ことばの認知空間』開拓社，東京.

On Acceptability of Intransitive Locative Alternation in English, Japanese, and Chinese

Fumihiro MORIKAWA

Locative alternation, or *Swarm* alternation, is a phenomenon where the same verb appears in two sentence patterns like "*Bees are swarming in the garden./The garden is swarming with bees.*" The locative phrase in the first sentence is "promoted" to the subject position in the second, and the subject of the former sentence is "degraded" to an oblique phrase with the preposition *with* in the latter. The acceptability of location-subject pattern sentences differs depending on the verb and the language.

This paper argues that languages differ with respect to what kinds of elements can be chosen as a subject. English, which accepts elements of various semantic roles as a subject, relatively easily allows location subjects. On the contrary, Chinese usually doesn't accept location as a subject and resist Figure/Ground reversal. Japanese falls between these two languages regarding the acceptance of location subjects. It permits intransitive locative alternation only when the verb describes (i) light emission or (ii) something fulfilling the location, where it is reasonable for one to connect the action or state to the location instead of the entity. Language reflects how humans view and construe situations, and in this paper I show some cross-linguistic commonalities and differences in the ways of viewing each situation.